間の宿舎

黒岩重吾

文藝春秋

人間の宿舎

昭和四十四年六月一日　第一刷

定価　五三〇円

著者　黒岩重吾

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話（二六五）一二一一
郵便番号一〇二

印刷　凸版印刷
製本　大口製本
製函　加藤製函

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© Jūgo Kuroiwa　Printed in Japan

人間の宿舎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

人間の宿舎

幻聴への約束

裝幀　朝倉　攝

英語の吉川教授は小柄だった。身長は五尺そこそこだろうか。鼻下に髭を蓄え銀縁の眼鏡を掛けている。その吉川教授が細いステッキを持ち大学の構内のポプラ並み木の下を歩くかたちだけで一幅の絵であった。エリオットの朗読が得意だった。英国の旧家の古びた書斎の中から現われて来たような教授で、英文学から生れ英文学に埋もれて死ぬような男だった。

その吉川教授が国民服を着て登校するようになったのは、昭和十九年の新学期からだった。菜葉色のその服は銀縁眼鏡や髭とは似合わなかった。そういえば吉川教授が詩の朗読をしなくなったのは、国民服を着出してからであった。

昭和十八年の学徒動員で大学の学部の連中は殆ど軍隊に取られてしまった。大学予科の三年生も三分の二が入隊している。残っている連中も続々と入隊し、秋には翌年入隊予定者と一部の病弱者を残し殆どが入隊の予定だった。十九年になって勤労奉仕の日課が学業の時間より多

くなり、学生達の中には勉学への熱意を放棄する者が多くなった。十九年の二月は草津の工場に行きタールフェルトの運搬に従事した。

四月になってから、新学期だというので暫く授業が行なわれることになったのである。

花村尚吾は吉川教授の講義が好きだった。たとえ吉川教授が国民服を着ていても、教授の講義を聞くと戦争や、前途に希望のない暗い青春を忘れることが出来るからだった。

その日吉川教授は俯いて教室に入って来た。猫背の吉川教授は視線を伏せ気味に歩く癖があるが、花村は一目吉川教授を見ておかしいと思った。全身に生気がなく病気のような感じだった。クラス委員の鹿島が起立、礼の号令を掛けた。鹿島は剣道部の部員で二段である。教練では何度も小隊長になり、喉が裂けるような大声を出し配属将校の受けが良かった。花村は鹿島を好かない。ことに教授への号令に何故あんなに大きな声を出さねばならないのかと不愉快に思っていた。

鹿島の号令を聞くと吉川教授は何時(いつ)も悲し気な顔をするのだった。あんな声を出す学生にT・S・エリオットの朗読をするのは辛いだろうと、花村は吉川教授に同情していた。だが今日の吉川教授は鹿島の号令に気まずそうに頬を慄わせた。もし病気だとすると、鹿島の声は身体にこたえる筈だった。花村はいまいまし気に鹿島を睨みつけた。

学生達が坐ると吉川教授は俯いたままで、今日は英語の代りにヒモロギイヤサカについてお

話しします、といった。

学生達は訳が分らず一瞬唖然としたが、その意味が分ると共に騒然となった。ヒモロギイヤサカ、というのは神道であった。

英文学の教授から神道の講義を受けようとは思ってもいなかった花村は余りのことに手をあげた。

「何でしょうか」

吉川教授は眼をしばたたきながら花村を見た。視線を合わせた時花村は、こんな悲しそうな絶望的な人間の眼を俺はまだ見たことがない、と思った。だがもう騎虎の勢いで花村は立っていた。花村は吉川教授に、エリオットと、ヒモロギイヤサカとどういう関係があるのですか、先ずその関係を説明して下さい、といった。学生達は力のない声で笑った。

吉川教授は黙り込んだ。花村が坐っても黙ったまま壇上に立っていた。悪い質問をしてしまったと花村は思った。

「英語の講義が、これから余り出来なくなりますので、つまり授業内容が変更になったのです」

と吉川教授がいった。追川が、ヒモロギイヤサカについては僕達はまもなく身をもって体験しようとしているので講義はいりません、それよりも面白い話をして下さい、といった。反対だ、吉川教授のヒモロギイヤサカを聞こうじゃないか、と怒鳴ったのは春海だった。春海は銃

剣道の部員だった。学生達は騒ぎ出し、吉川教授は黙ったまま三十分近くも教壇に立っていた。そして学生達の騒ぎが静まると黒板に天照大神と書いた。

吉川教授が話し出した時に授業は終った。

花村は春の陽が照り渡った校庭に出た。ポプラの葉は青く赤煉瓦の校舎が変に孤独な感じで建っていた。芝生の向いにはこれも赤煉瓦のチャペルがあった。花村の胸には言葉に出せない激情が渦を巻いていた。そして渦の中心部は喉に向わず胸の深部を求めて下りて行く。アルトハイデルベルクは終ったのだ、と花村は思った。

広い校庭に学生の数は少なく、彼等は妙に押し黙ってベンチや芝生に坐っていた。春海が肩をいからせて花村の傍に来て、話がある、という。花村は春海の後から黙ってついて行った。春海が花村を銃剣道の部員室に連れて行こうとしているのに気付いた花村は、待て、といった。チャペルの傍に古い五色のギヤマンが陽の光りにあえかに光っていた。春海が振り向いた時、花村はすぐに春海との格闘を決意していた。花村は小柄だが中学時代は三年まで柔道部にいて、茶帯を締めていた。

「何の用だ、ここでいえ」

花村は春海の両足に視線を向けていた。機を見て春海の両足にタックルし、相手の股間に拳を使用する。春海は花村の殺気に少しとまどったようだが直ぐ肩を張り、君は校則に反して五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

分刈だが良くないじゃないか、といった。花村は自分はやりたいようにしてやって行く、お前に文句はいわせない、と答えた。

花村は都会で育ったが、事情があって奈良の山奥の中学に入学しなければならなかった。勤労奉仕の業績を自慢する中学校で、花村は中学を出ることばかりを考えていた。菜葉服にゲートルを巻き下駄ばきで登校する中学校の雰囲気に花村は耐えられなかったのだ。

だから四年終了と同時に当時の中学生が憧れた旧制高等学校を受験せずに、スマートさを誇る京都の私立大学の予科に入ったのだった。子供の頃から束縛されるのが嫌いだった。

小学校の頃、父と喧嘩をすると表に飛び出し、人殺し、人殺し、と喚いては隣り近所を驚かせた。そういう性格の花村にとっては、戦争の悪化と共に軍部によって強制された学生の軍隊化が憎かった。その尻馬に乗った春海の文句には絶対従えなかった。

「やるか、やらないのか、やるならこれから毎日やるぞ」と花村はいった。

「俺は何も喧嘩する積りはない、注意したまでだ」

そういう春海をもう一度睨みつけておいて、花村は校舎に引返した。

花村は大阪から汽車で京都に通っていた。大阪に帰るとあてもなく心斎橋や難波(なんば)の地下街をうろつき、水っぽいコーヒーを飲みながら喫茶店で詩を書き、古本屋で買った、ランボー、リラダンなどを乱読し、女性をハントする、それが花村の、暗い時代へのせい一杯の青春の抵抗

だった。難波の地下街の喫茶店にはそういう連中が集っていた。

当時の地下街にはTデパートの大食堂があり、その向いに喫茶店やフルーツパーラー、中二階に名物食堂があったが、十九年になると喰べるものもなく、次第に開店休業の状態になりつつあった。喫茶店はなんとかやっていたが、夏頃までには休店するだろうといわれていた。

吉川教授がヒモロギイヤサカの講義をした日、花村は何処にいても身の置場がないほど憂鬱だった。地下の喫茶店に顔を出してみたが、虚脱したような軟派学生と話す気もせず、歌舞伎座の地下の名画劇場に行った。そこではまだ往年の外国映画の名作を上映していた。行ってみると幸いにもグレタ・ガルボの椿姫を上映していた。花村は訳もなく涙を流した。映画が終り眼を真赤にしてロビーに出て見ると貼り紙があって来月から日本映画の名作を上映すると書かれていた。ここもか、と花村は思った。自由への扉は次々と閉ざされ、別な入口に行こうとすると、そこも嘲笑するように閉じられるのだった。

こういう時に花村の身心を慰めてくれるのは飛田遊廓しかなかった。白粉臭く、油薬で柔かくなった女の身体と一体となっている時だけ、花村は総てを忘れることが出来た。

花村はすでに中学時代、旅館の女中によって童貞を破られている。そういう意味で、女に関しては早熟だったのかもしれない。

予科三年のクラスメートで、女を知っている者は数人しかいなかった。

花村は毎月二十五円の小遣を貰っていた。当時飛田では一時間五円で、泊りは十円からだった。旨く値切ればショートタイム三円五十銭か四円で遊べないこともないが、普通は五円なので、花村の小遣では再々行くわけにはゆかない。月二回行けるのがせいぜいだった。花村は学生服を国民服に着換えるため、いったん住吉の自宅に戻った。学生服でも遊廓に入れたが、見付かればそれこそ退校処分であった。家に戻ってみると昨年学徒出陣で入隊した友人の井植から葉書が来ていた。

大竹海兵団からで次のような文面だった。貴様と別れて半年になる、貴様も元気と思うが俺も元気だ、現在はただ夢中で頑張っている。貴様の家の傍の池畔で貴様が射った雀の味は素晴しかったぞ、貴様が来るのを待っている。

花村は短い文面を何度も読み返した。井植は花村の数少ない友人の一人で典型的な自由主義者であった。どうせ戦争に行くなら陸軍より海軍の方が良いといって海軍予備学生を志願したのだった。入隊する前日、花村は井植のために早朝から空気銃で雀を射った。

肉は配給でなかなか手に入らない。だから花村が射った雀は貴重な珍味であった。

花村は十数羽獲り、配給の酒で池畔の土手で、井植と酒盛りをしたのだった。

リラダンやランボーの名を知ったのも、井植からだった。井植は焼いた雀の頭を音を立てて噛みながら、何度もこんな戦争で死んでたまるか、といった。そして花村に、君も空気銃で思

い切り雀を獲って栄養をつけ、兵隊検査の前には醤油でも飲んで、僕が帰るまで待っていてくれといった。そして、酒盛りの後池畔を散策し、花村の家でベートーベンの第九を聞き涙を流した。

そういう井植の葉書にしては、やたらに書いた貴様という言葉がそぐわなかった。

海兵団の教育の中で井植の気持も変ったのかもしれない。花村は遊廓に女を買いに行く意欲も失ってしまった。

花村の父は電気技師だったが軍の依頼で、マレー半島のクアラルンプールの発電所を建設に行っていた。父は建設団の団長だった。

花村は四月に兵隊検査を受けており、第一乙種だった。ただ入隊通知を待つのみだった。

戦争の悪化で将校を失った陸軍は海軍の予備学生に倣い、特別甲種幹部候補生制度を設けた。この制度は一般の入隊と異なり、将校になるために特別採用するのだが、花村は受けなかった。残っている連中で特甲幹を受けなかったのは数人で、彼等は配属将校から散々絞られたものだ。

だから花村は入隊命令が来れば、二等兵として入隊することになる。

その夜花村は日記帳を開くと、アルトハイデルベルクは、俺の人生から完全に去った、と書いた。

九月になった。授業は二十日までで下旬からは大阪の港の近くに勤労奉仕に行くことになっ

た。その後も残っている学生の入隊は絶えず、他のクラスを合せて二十数名に減っていた。

七月に入って花村にも入隊通知命令が来たが、何故か間もなく延期になった。二十数名のうち十数人は年齢の関係で来年の入隊だった。特甲幹の試験に合格した鹿島や春海も入隊待ちで勤労奉仕隊に加わっていた。

今度の勤労奉仕というより勤労動員は今までと違い、作業場の傍の宿舎に寝泊りすることになり、その点学生達の行動は強く束縛される。軍隊に入る迄の僅かな期間位自由にさせて欲しいというのが学生達の声だったが、学校当局としては軍の命令だからどうしようもないという。

夏も近い暑い陽が照りつける校庭に学生達は集合した。それは全く奇妙な一団だった。俗にいうアンパン帽を被った学生達は思い思いの服装で整列した。このアンパン帽というのは慶応と同じ恰好の帽子で、花村の大学では予科生が被ることになっている。思い思いの服装というのは、宿舎に行くまでの服装について特別に命令が出なかったためだ。ただゲートルだけは巻いて来いということだった。

春海や鹿島など時勢に即応し戦争に参加することに情熱を感じている連中は、教練用の菜葉服に軍靴ゲートルという服装で、そうでない者は黒い制服にゲートルを巻いたり、上衣は制服でズボンだけ菜葉ズボンの者もいた。アンパン帽をあみだに被っている者もあれば、眉が隠れる位深く被っている者もいた。張り切っている者、どうでも良い者、抵抗を感じている者各人

各様で、これほど意志が統一されない一団も少ないだろう。

みなスーツケースをさげ、腕にA大予科勤労奉仕隊と書いた腕章を巻いていた。

花村は黒い制服にゲートルを巻いて行ったが、一人だけゲートルも巻かずに来た者がいた。花村達の学年で最も不良学生の瀬川であった。瀬川はアンパン帽を油で光らし黒い短靴も見事に光っていた。瀬川も大阪からの通学生で、心斎橋などうろつく一人だが、花村は余り瀬川とは親しくなかった。

というのは瀬川の不良ぶりは花村とは行き方が違い、本物の愚連隊と交際しているような男だからだ。青白い顔で眼付が鋭く勉強など殆どしない。道頓堀をさかさに読んだトンボリ団という愚連隊にも加入しているという噂で、鹿島や春海も瀬川だけは敬遠しているようだった。その代り配属将校に一番擲られるのも瀬川である。官立大学と違って私立大学にはこのような学生とも愚連隊ともつかないような若者が必ず存在している。

花村は瀬川がゲートルを巻いて来なかったことに感心した。瀬川を見直したような思いだった。花村は鹿島や春海達と一つの屋根の下で生活する以上、必ず衝突するという予感がしていた。その際は瀬川を自分の味方にしておいた方が得策だと判断した。

この奇妙な一団の引率者は吉川教授であった。国民服にゲートルを巻いた小柄な吉川教授の姿はどう見ても貧弱だった。銀縁の眼鏡も古道具屋で棚ざらしになっている五十銭位の眼鏡に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com